

巻頭言



「自給率の向上と自然観」

(財)日本植物調節剤研究協会 理事 田代茂喜
住化武田農薬㈱ 代表取締役社長

昨年、国は食料自給率の向上を目指した新たな「食料・農業・農村基本計画」を策定し、先進国中最低レベルで8年間低迷し続けている我国の自給率40%（カロリーベース）を2015年度には45%まで向上させることを目標にしています。また、本年4月には今後の農政を方向付ける「新農政プラン」が決定され、比較的大規模農家に絞って補助金を交付し諸施策を集中させる「担い手対策」を含め多岐にわたる農政改革の推進策が打ち出されました。

最近では食料輸入国における経済的事情や食料の内容と質も急変してきており、お金を払えばいつでも必要な食料を必要量輸入できるのは日本だけという時代は終わろうとしています。中国やインド等の発展途上国における高い経済成長率や世界人口の急激な増加傾向等を考え併せると、飽食を享受している我国に食料危機が表面化するリスクが日増しに高まりつつある現実を認識しておかなければなりません。弱体化している農業経営の見直しや国際競争力のある農業者の育成および担い手に対する支援等、農政改革に係わる諸施策を実践し、着実に自給率を向上させていくことが期待されています。

さて、人は基本的な欲求（食欲）が満たされると生活にゆとり感が出て、自然環境に対しても関心がより高まり、自然観を身近なものとして抱くようになります。自然観は、育った国、地域、宗教、文化や自然条件等によって異なり、また時代と共に変化します。英国本島では、かつては岩山や雑木林に覆われていた荒地を造成した牧草地帯の風景を、日本では棚田や里山の風景を自然観として持つ人が多いようです。里山にはどことなく郷愁を誘われ、また実り豊かな農村風景を眺めていると心が和みます。里山

は半世紀前まで日本全国至る所に点在し、食料増産に大きな役割を果たして来ました。日本人が白米を腹いっぱい食べられるようになった1960年代から経済の急成長に伴って、都市近郊にあった鎮守の森や里山はニュータウンとなり、また中山間地域においても市街化が進み里山風景を見られる地域が少なくなりました。自然環境破壊の根源は、人間中心的な自然観によるところが大きいと言われています。国は農業経営が比較的小規模の地域で里山として残しておくべき地域にも景観保全に係る支援を行い、生態学を取り入れた生命中心のより自然観のある棚田や里山の風景を日本の財産・遺産として子々孫々に至るまで残しておくような基本計画の策定も、喫緊の課題ではなかろうかと考えている次第です。

ところで本題と外れますが、1948年に「農薬取締法」が制定されてから半世紀以上が過ぎました。1960年代から科学的根拠に基づき人畜や自然環境に対して負荷が大きいと考えられた農薬は使用禁止となり、その後も毒性や水環境負荷も含めて安全性評価基準が幾度となく見直され、その都度法改正が行われ安全性が確認された農薬のみが登録されるようになり、本取締法の制定当初のような粗悪な品質の農薬を取締めることはなくなりました。しかし、消費者の多くは取締法という用語から農薬も「毒物及び劇毒物取締法」や「麻薬及び向精神薬取締法」に準じた取締りが必要だと思い込んでいるのも事実であります。医薬においては「薬事法」という用語があるように、農薬取締法もより現状に則した用語に代えるべき時が到来していると思うのは、私のみでしょうか。